

保育者の新しいノート (9)

S. K. 生

(1)

○八月十五日を迎えて急に思いだす譯ではないが、わが國は戦争に負けて、無条件降伏をしたのだということだ。しかも敗戦ということは、決してあの日のこと、過去の記憶ではない。平和條約が出来て、一人前の獨立國になれる日までは、毎日敗戦のまゝなのだ。しかもそればかりではない。この頃の有様を見るにつけ、開けば、日に日に敗戦感が強くなる。悲しいことだが、この現実は、しつかり考えなければならぬ。

○主食の運配なんて、戦前の生活には思いよらぬことだが、戦前の日本の米は、どうして得られたものかということを思うときこれこそ敗戦のてきめんの結果だ。領土の狭くなつた、しかも、米のよく出来る領土を失つたのである。アメリカからの放出許可食料でやつと生きていたようなものの、全く容易なことではない。豆やとうもろこしや、まづいのなんのと、いえたものではない。

○物の價の高くなるのも恐しい位だ。恐しいといえば、毎日の新聞で見る恐しい記事は、これが、わが國內のことかと思ふ位である。ほんとうに、往來もうつかり歩けず、夜も安心していられない。しかし、これも生活に苦しいのがもとだし、日本人が、こんなことになつたのも、敗戦のてきめんの結果だと思ふと、なんとも言いようのない思

いがするばかりだ。

○敗戦の結果でこぼこになつている社會には、敗戦國と思えないような、浮いたことも、ぞいたくも行われているようだ。それを見たり聞いたりすると、つい敗戦の現實を忘れたりしそうになる。しかし、それがいけないのだ。わたし達は、どこまでも、敗戦の現實に厳しく生活しなければならぬ。

(2)

○しかしまた、この厳しいなかにも、だんだんと、ぐんぐんと、再建の希望が實現せられて来るのは有り難いことだ。降伏二年というのに、講和條約の予備會議が、やがて開かれるということだ。貿易開始は、この八月十五日からときまつた。押し込められていたものに、窓があげられ、戸口があげられるような喜びだ。

○が、それは希望の光りだ。その光りと共に、敗戦の現實がすぐ暮るものと思つてはならない。ばい償もだんだん實行されなければならぬし、失業者もふえるだろうし、日々の實際の生活は、まだまだ苦しくなるものと覺悟していなければならぬ。再建のための仕事は、なみ大抵の骨折りで出来ぬ。

○それにしても、その中で、こうして、教育の仕事を受けもたせて貰つている私達だ。一時もうかうかしてはいられない。子どもの前では、ここにこしているけれども。